

 書評

Michael Gelder, Richard Mayou, John Geddes 著,
山内俊雄 監訳, 丸山 敬 訳

オックスフォード・精神医学

西園昌久

医学教育は精神医学教育を含めて、知識、技能、態度の3側面がどれにも偏ることなく学習されるものであらねばならないといわれる。本書は初心者から専門家まで段階別に書かれた数種のオックスフォード精神医学教科書シリーズの中で医学生、プライマリケア医などを対象にした Oxford Core Text Psychiatry Third Edition, 2005 の邦訳である。3人の著者のうち筆頭の M. Gelder 教授は世界精神医学会(WPA)と世界医学教育連盟(WFME)が、合同で、世界各国の精神医学教育についてカリキュラムを明示して勧告した報告書(1997)をとりまとめた会議の責任者であった。評者も委員として会議に加わった経験があるので、いっそう、この翻訳書には興味をそそられた。

まず冒頭の第1章、第2章で、先述した知識、技能、態度の3つの目標が具体的にどのような記載されるか見てみよう。第1章は「徴候、症状、診断」であるが、必要な症状の記載説明にとどまっていない。「診察と診断は患者理解の一部に過ぎない。診察も診断も各患者を唯一無二の人間であると理解することに、裏打ちされていなければならない。これは本からだけでは学べない。患者の訴えに真摯に耳を傾けて初めて学ぶことができるものである」と態度のかけがえのないことを明記している。第2章の「評価」の情報収集の項目の中で、面接場面での患者の椅子の取り方、医師の座る位置という技法について述べている。あくまで、患者中心である。これが本書の第1の特徴。

次に、章立てについてであるが、ある種の工夫が読みとれる。はじめの3章で、総論的なこ

とが述べられた後で各論に入るが、まず第4章「人格と人格障害」、第5章「ストレスに対する反応」が取り上げられている。つまり、人と環境とのかかわり、人が心を煩うということはどんなことを理解し考えることが準備されている。記憶するだけでなく、考えることを薦めているのが本書の第2の特徴。

各論には他の精神医学教科書で扱われることは当然、本書でも記載されているが、その中にあって、第13章「自殺と意図的自傷行為」、第15章「性とジェンダーの問題」など現代社会が作り出している精神医学の今日的課題が大きく扱われている。精神医学を身近なものにしようとする意図が伝わってくる。それが本書の第3の特徴。

第8章「気分障害」の中での、「患者は職場で働き続けるべきか?」「入院は必要か?」「精神科医の紹介は適切か?」「抗うつ薬での治療は必要か?」、第9章「統合失調症と関連精神障害」の中での「薬物抵抗性の症状への対応」さらに再発防止が強調されるなどエビデンスに基づいて、問題中心でしかも具体的に解決策が述べられている。それらが本書の第4の特徴。

治療に関しては、第17章「薬物およびそのほかの理学療法」、第18章「心理学的療法」、第19章「コミュニティのためのメンタルヘルス・ケア」の3章があげられている。

ともあれ第一級の精神医学教科書として推奨したい。訳も大変すぐれている。

(心理社会的精神医学研究所)

● B5 331頁 2007 定価6,090円(本体5,800円+税) 丸善